

ポーリン・ボス「曖昧な喪失」研究の検討：  
その理論の概要

|       |                                                                                                    |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2008-01-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 南山, 浩二<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.14945/00000462">https://doi.org/10.14945/00000462</a>                  |

# ポーリン・ボス「曖昧な喪失」研究の検討

## —その理論の概要—

南 山 浩 二

### 1. 本論の目的と意義

本論文の目的は、ポーリン・ボスの「曖昧な喪失 (Ambiguous Loss)」<sup>(1)</sup>に関する議論 (Boss, 1999, 2002a) を概観し検討することにある。ボスは、今日まで「家族問題」研究の一つの主要な動向を形成してきた家族ストレス (family stress) 研究を担う一人であり、とりわけ、ヒル (Hill, 1949) が呈示した ABCX モデルのうち、C 要因、すなわち認知要因に焦点をあて研究を続けている。バーらによる (Burr et al, 1979)、実証主義的傾向を批判した、いわゆる家族研究におけるポストモダンシフトに関心をよせ、自らの方法を文脈的アプローチと呼んでいる。そして、より主観的なデータの重要性をとき、今日、他の多くの家族ストレス研究者も同様の関心を抱いているとしている (Boss, 2002a:34-35)。

ボスは、こうした立場から、これまで、「家族」「恋人」など、一般に「親密」とされ、関係において経験される喪失のうち、「曖昧」な喪失体験に焦点をあて、議論を続けている。ベトナム戦争の行方不明兵士 (MIA: Missing Person in Action)、成人子の離家、アルツハイマー病患者や慢性精神病患者、夫婦の不和、離婚と再婚、養子縁組、子どもの誘拐、移民、などを題材とし (Boss, 1999, 2002a)、そして、最近では、9.11、すなわち、2001年9月11日ニューヨーク世界貿易センタービルテロ事件の被害者家族について調査研究を行っている (Boss, 2002b)。このように研究対象は、多岐にわたっているが、それらすべてに通底しているのが「曖昧な喪失」体験なのである。

彼女は、現在、Department of Family Social Science, University of Minnesota の教授であり、家族とメンタルヘルスに関わる講義を担当している。Family Economic Well-Being (家族の経済的安寧)、Families and Mental Health (家族とメンタルヘルス)、Family Diversity (家族の多様性)、Relationships and Development across the Lifespan (ライフスパン上における関係と発達) が、この Department

の教育・研究およびコミュニティへの貢献における4つのコア領域として掲げられているが (Trochmann et al, 2001)、彼女の研究もまた、学際的かつ、「家族問題」への強い実践的志向性といった特色を有している。日本の家族社会学において、ボスは、前述したように家族ストレス研究の論者の一人、そして、また、家族研究の理論と方法についての包括的なテキスト *Sourcebook of Family Theories and Methods* (1976) の編者の一人として、一定の評価を得ている。しかしながら、彼女の研究と、家族療法家としての実践との連関については、あまり知られていない。彼女が、研究と実践との循環関係に重きをおき、その理論が極めて実践志向的であることを理解することが、彼女の研究の全貌をつかむための、重要な作業となるであろう。このことについては、本論文における主な検討対象となる彼女の著書、*Ambiguous Loss* (1999) により、よく知ることができる。

ところで、家族研究の主たる学術誌である *Journal of Marriage and The Family* が、その誌名を、*Journal of Marriage and Family* へと変更したことは、記憶に新しい (National Council on Family Relations (2001) Vol.63-No.1)。「The」が消去されただけのことと一蹴されがちではあるが、その学史的意味はあまりにも大きい。また、日本家族社会学においても、「この学問が中心的領域として、多くの業績を挙げてきたことは疑いもないことだが、しかし、そのことの潜在的帰結として、学問的 (知識社会学的) 反省もややもすれば軽んずることはなかったであろうか。『家族』の (あるいは『パラダイム』の) 存在の自明性の上に学問的営みを積み重ねてきた、ということはなかっただろうか」(渡辺, 1996:3-4) との指摘がなされている。すなわち、「一定の家族像を前提に家族を研究すること」—とりわけ構造—機能主義的接近—への疑問は、すでに確信の段階にあるのであり、現実の「家族」が多様化しているとの認識や、いわゆる「言語論的展開」以降の学的動向を背景として、「個人」「意味」「解釈」「相互作用」などに着目する研究の隆盛を認めることができるのである<sup>(2)</sup>。

無論、「モデルなき時代」の「家族問題」研究も、また、当然のことながら、既に新しい局面にある (清水, 1998:31-83)。一定の家族モデル (=近代家族) からの逸脱に「家族問題」の原因を見出すのではなく<sup>(3)</sup>、一見してネガティブに見える現象が「家族」という場で生じているように見えるが、それは、従来支配的であった家族モデルが社会の構造変動や個人が志向する家族的関係と合わなくなってきたことに伴って表面化した徴候であるとするパースペクティブへと、その視角は移行している (山根, 2000)<sup>(4)</sup>。また、構築主義的研究、「主観的

家族論」としてくくられる諸研究による「家族問題」への視角もまた、確かに「家族問題」そのものへ接近するものではないとも言えるが、「家族」を「実体」として前提しないという点において、同じ系譜を担うものといえる。

ボスの議論もまた、こうした学的動向と無縁ではない。彼女が考える「家族」は、ある意味ルースであり、離婚と新しい拡大家族、養子縁組、生殖技術と家族関係、性役割の再編、インターレイシエルな結婚と親密な関係、同性愛カップルなど、アメリカの「家族」が経験している多様化についての議論にも敏感である (Boss, 1999, 2002a)。「我々は常に絶対的に誰が、家族であるかについてはっきりしているわけではなく、我々自身の家族においてでさえである。家族の構成は、状況が変化し、喪失と付加が起こるにつれて、家族成員の心の中で変化し続けるのである。」(Boss, 1999:4) としているように、とりわけ、彼女がとらえる「家族の範囲」「家族境界」は、極めて緩やかなものである。

また、彼女は、「曖昧な喪失」を経験している「家族」や「親密な関係」にある人々のナラティブに注目する。家族ストレスは、「家族」がその中で生活している、より大きな文脈と切り離し、理解することはできないが、「家族」は、「家族成員」が経験しているストレスフルな状況に関する、彼らの間で共有された意味に基づいて（あるいは、その欠如に基づき）、象徴的現実を構築していると考えている。そして、今日、意味や認知に焦点をあわせることが、家族のストレス管理や弾性を理解することにおいて、中心的なものになっているのである (Boss, 2002a:36)。曖昧な喪失を扱うセラピストや医療従事者は、家族にとって、その喪失がどのような意味をもつのか、そのことを理解するために、彼らが語る喪失の物語を聴かなければならないとする。なぜなら、彼らの物語のなかに、彼らのディストレスの源泉とその意味に関する手がかりがあるからである (Boss, 1999:132)。このような視点は、従前の医学モデルの限界性を示してきたナラティブセラピーをめぐる議論とも共通性が少なくないのである。

よって、Boss の「曖昧な喪失」に関わる議論について検討することは、「モデルなき時代」の「家族問題」研究がとりうる一つの方向を探る手だてとなるはずであり、本論の試みは、ある程度、意味をもちうるだろう。

## 2. ポーリン・ボスのプライベートヒストリー

まず、ボスの「曖昧な喪失」に関する議論の検討にはいる前に、やや唐突な

ことに思われるかもしれないが、ボスのプライベートヒストリーについてふれておこう。このことは、単なる形式的な意味にとどまらないものである。なぜなら、彼女の「曖昧な喪失」に対する持続的な関心は、そもそも、彼女自身の私的な体験を基点に始まったものであり、彼女の「曖昧な喪失」研究をよりよく理解する上で、彼女のプライベートヒストリーを知ることの意味は大きいと考えられるからである。彼女自身も、自らこのことについて言及している (Boss, 1999)。

彼女は、アメリカ中西部ウインズコンシン州の移民のコミュニティで生まれ育ち、後に、ウインズコンシン大学マディソン校で学び、教授となるまで、この地で生活していた。彼女の両親と祖父母は 1900 年代初頭、ウインズコンシン南部の肥沃な谷に、よりよい生活を見出すために、大西洋をわたったスイスからの移民であった (Boss, 1999)。著書 *Ambiguous Loss* の第一章の初めに、次のような文章がある。

「……………しかし、常に生活がよいものであったわけではない。なぜなら、スイスに、最愛の家族を残し、離ればなれになっていたからである。手紙が少なくとも第二次世界大戦まではきていたが、それは、ほろ苦いものであった。それらは、次のような表現で閉じられていた。「私たちは、ふたたび会えるのでしょうか？」私は、父が、父の母親や兄弟から手紙を受け取ってから、何日か、ふさぎ込んでいたのを覚えている。そして、私の母方の祖母は、母国に残した彼女の母を、いつも恋しがっていた。彼女は、貧しさやこの戦争ゆえに、旅などできるはずはないので、決して、母親と再会できないことがわかっていた。ホームシックが、私の家族の文化の中心的なものとなった。私は、本当に、誰が私たちの家族なのかそうでないのか、あるいは、どこが本当の故郷なのか、わからなかった。故郷は、スイスなのかそれとも、今、生活しているアメリカなのか？私が今までに見たことも会ったこともない人々が、本当に私の家族なのか？私は彼らのことを知らなかったが、私の父や祖父母が知っていたことは、鮮明にわかっていた。何度となく、彼らの思慮は彼方遠くにあるようだった。彼らの愛する家族成員の喪失は、決して解決されることはなかったし、それゆえに、彼らとともに生活する者もまた、不在と存在の曖昧さを経験したのであった」 (Boss, 1999:1-2)。

父親や祖父母は、故郷スイスに愛する「家族」を残していた。貧困と戦争は、

再会を事実上不可能なものにしていたのであって、彼らが思い焦がれる「家族」は、彼らの眼前には存在していなかったのである。こうした事態は、当時の状況においては、「死」に近い意味を持ちえていたのであり、そのことを示す端的な例として、アイルランド人の親たちが子どもをアメリカへと送り出す離別のシーンに関わるある記述に言及する。親たちは、子の出発を、まさしく「葬儀」のように考えていたのであり、共同体の人々、とりわけ、親たちは、旅立つ人が、「死んでしまった」かのように悲しみ最後の別れをつげたという (Boss, 1999:139-40)。こうした共同体により承認された別れの儀式は、象徴的に離別を完成させることによって、親たちが、喪失を半ば、「永久的」なものとし、悲哀の過程へと向かうことを可能にしたものであったということもできる。しかし、ボス自身の家族経験の場合、そうではなかった。身体的には切り離されているが、心理的には存在し続けているために生じた不確かな喪失。彼女の父や祖父母は、こうした「曖昧な喪失」に直面せねばならなかった。

彼らだけではない。「彼らとともに生活する者もまた、不在と存在の曖昧さを経験した」とあるように、彼女自身も「曖昧性」を経験した一人であった。すなわち、自分が未だ対面したことのない、父や祖父母が思い慕う故郷の人々は、自分の家族に含まれるのか、自分の故郷はどこなのか、彼女は、「家族の境界」あるいは自らのアイデンティティに関わる疑問を持ち続けなければならなかった。そして、さらに、眼前にいる父は「曖昧な喪失」に直面し、しばしば、彼女にとって情緒的な頼りとならないこともあったとあり、「父親は目の前にいるが、父として頼れない」という存在の曖昧さを経験していたのであった。彼女は、また、著作の中で自分自身の離婚・再婚経験についても言及する。

「私自身の事例であるが、私は、最初、家族療法家である、Carl Whitaker の意見、「あなたは、決して離婚することができない」を拒絶した。しかし、何年かたち、私の前夫と私が、私たちの息子の結婚式のディナーを共同主催したとき、彼が、相互の友人の死について話すために私に電話をしたとき、そして、彼と私が、新しい配偶者を、娘の休日のディナーパーティーと孫の誕生のお祝いに連れて行ったとき、私は、Carl Whitaker が、正しかったことを悟ったのであった。かつての関係は、単純に、姿を消してしまうのではないのである。……………」 (Boss, 1999:32)

離婚によって、前配偶者との関係が完全に消去されるわけではない。失われ

る部分もあれば、継続する部分もありうるという、曖昧な喪失である。彼女は、離婚と再婚のプロセスを円滑に進めるためには、「ある意味、一夫一婦制の概念を断念しなければならない」とも言う。なぜなら、離婚・再婚は、永久に生活構造の一部なのであり、しばしば、前配偶者との関係に関わる記憶は、残存することとなる。さらに、前配偶者が生存しており、共同で養育すべき子が存在するならば、関係は、完全に解消されることはないのである (Boss, 1999:33)。このように、離婚と再婚という家族イベントは、個々に完結し独立したイベントなのではなく、ゆえに、関係の解消、そして、新たな関係の形成ということにはならない、という離婚－再婚のリアリティを、自らの経験を通じ獲得したのであった。彼女は、離婚を否定しているのではない。離婚家族は、「欠損家族 (broken-family)」ではなく、従前の関係が修正されたバージョンにすぎない (Boss, 1999:34) としており、多くの人々にとって、離婚・再婚に伴う関係再編は、対処しうることがらなのである。そして、彼女は、離婚後、故郷で高校の教師をしていた姉エリーと、妊娠、出産、育児において、互いに気づかい、ともにお互いの子どもの面倒をみあっていた頃のことを回想し、それぞれの赤ちゃんがあたかも「一つの大きな家族」に混在していたかのようにであったと記述している (Boss, 1999:83)。これは、相互扶助的な関係の成立と家族境界の伸縮性との関わりを連想させる記述である。

著作や論文においても言及されているように、彼女にとって、この二つの経験、とりわけ「移民」に関わる経験は、彼女の人生史において、生活から切り離し、忘却することのできない経験であり続けたのであった。「過去」に区切りをつけ前進するために、どのように、これらの経験に意味を与え、自分の人生史に秩序付けることができるのかが、彼女自身が抱えていた問いでもあった。その後の研究者としての道程において、彼女にとって、ある意味、類似した経験をしている人々のナラティブの分析を通じ、自らの経験と人々の経験を構成する事象にラベルを付与し、概念づけていくこととなるのである。とくに、1974年、サンディエゴアメリカ合衆国海軍保健調査研究所捕虜研究センターのスタッフとの共同研究として、ベトナムとカンボジアの戦闘において行方不明になったとされたパイロットの家族(妻)を対象に実施された調査 (Boss, 1977, 1980) が、「私が曖昧な喪失という現象を定義することを可能にした調査」であり、「私が、喪失をより複雑なものにすることにおける曖昧性の力について、初めて学んだのが彼女たちから」であったと回想しているのである (Boss, 1999, 12-13)。

### 3. 「曖昧な喪失」

以上、みてきたように、ボスの「曖昧な喪失」に対する関心は、彼女の個人的な経験に端を発しているのであった。では、彼女はどのように理論化しているのだろうか。彼女の議論を概観しよう。

#### (1) 「家族」観

既に述べたように、ボスの捉える家族は、ルースである。彼女は、家族がどのようなメンバーから成り立っているのか、考えていくうえで、身体的に世帯の内側に存在しているということだけではなく、「心理的な家族」についても着目する必要があるとし、家族の境界は、家族成員の喪失と付加によって、変化するものであり、可變的なものとして位置づけられている。「この家族観は、生物学的に関連しているという基準よりも、心理的に、そして身体的に存在しているという基準を強調するものである。」ともしており、血縁や婚姻を媒介に成立する関係や、ヘテロセクシズムをこえた関係をも射程におさめている。また、バージェスの定義 (Burgess, 1926) に基づき、「家族を相互作用するパーソナリティの統合体」と位置づけている。つまり、制度論的アプローチにより、家族を定義するのではなく、日常の生活を基点に「家族」を捉えようとしているのである (Boss, 1993, 1999, 2002)。

そして、セラピストや医療従事者としての実践場面においても、専門家が、「家族の義務」「家族の範囲」を定義し、「家族」に強要するのではなく、彼らが、「家族がなすべきこと」「家族と思っている人々」を重要視すべきことを強調する。また、「確かに、一人の家族成員が危機に面しているならば、私は介入しなくてはならないが、私の主要な仕事は、聴き、導き、刺激し、あるいは質問し、そして、家族が転機 (エピファニー) に達するのを根元的に助けるブレインストーミングのプロセスを妨げないこと」であるとも、述べており、当該家族が内面化している、信念、ジェンダー役割、世代役割、文化的価値が如何なるものであっても、それらを批判しないことによって、家族の変化への抵抗は和らぐのだとしている (Boss, 1999:114)。

#### (2) 「曖昧な喪失」

こうした観点から、「曖昧な喪失」を次のように定義する。すなわち、家族システムにおいて、一人の家族成員の身体的あるいは心理的な存在／不在に関す



る曖昧性がある場合、その状況を「曖昧な喪失」と呼んでいるのである。そして、家族による、曖昧な喪失という状況についての解釈あるいは認知を「家族境界の曖昧性」と定義する。言い換えれば、誰が家族の内部におり、誰が家族の外部にいるのかわからない、ということである。なお、身体的存在とは、家庭における現実の身体的な存在を示しており、心理的存在とは、（たとえ身体的には不在であったとしても）家族成員が、認識的、情緒的に存在しているものと考えられることを指している（Boss, 2002a:95-96）。

また、こうした家族の認知や対処に影響を与えるものとして、家族外部の文脈／家族内部の文脈をあげる。家族外部の文脈とは、家族のコントロールをこえたものであり、文化、歴史（的イベント）、経済状況、家族・個人の発達段階、などがあげられている。一方、家族内部の文脈とは、家族が変更しコントロールしうるものであり、構造的文脈、心理的文脈、そして家族の内面化している価値や信念体系などが、あてはまるという（Boss, 2002a:40-46）。

ところで、ボスは、「曖昧な喪失」には、2つの類型があるとする（Boss, 1999, 2002a）。第一のタイプは、身体的には不在であるが心理的に存在していると認知されることにより経験される喪失である。このタイプの喪失が生じうる状況として、行方不明兵士と誘拐された子供たち、自然災害における行方不明、人質・拘禁、移民、養子縁組、離婚、転勤、成人子の離家、高齢者の老人ホームへの入所などが列挙されている。

第二のタイプは、身体的に存在しているが、心理的に不在であると認知されることにより経験される喪失である。アルツハイマー病や他の痴呆、慢性精神病、脳挫傷、脳梗塞、アディクション、移民、仕事への過度のコミットメント、コンピュータやインターネット、TVへの強迫観念、などが、このタイプの喪失が生じうる状況として考えられている。

留意が必要なのは、列挙された諸事例をみてもわかるように、いずれのタイプの喪失も、「予期しない破局的な状況」だけではなく、より、日常の「ありふれた」状況においても、生じうるとされていることである。例えば、夫の仕事への過度のコミットメントによって生じる心理的不在などもあてはまるのである（Boss, 2002:56-57）。

### (3) 「明確な喪失」との違い

では、「曖昧な喪失」経験はどのようなものなのだろうか。詳しく見てみよう。

「曖昧な喪失」は「親密」な関係にある人が、失われたのかどうかが不明確

なため、「明確な喪失」とは違い、喪失を経験している人々にディストレスを生じさせるのだという。最も「明確な喪失」とは、死であり、遺体の存在あるいは、死亡証明書、葬式、埋葬の儀式、埋葬および灰の散布などによって成文化されたイベントを通じて、人々、コミュニティによって、確かに「失われた」と明確に承認されるのだとしている。そして、多くの人々が「永遠の喪失」が生起したことを認め、哀悼を始めることに同意するのである (Boss, 1999:9)。

それに対して、「曖昧な喪失」は、その経験に対する象徴的儀式もなく、人々やコミュニティの承認もえられることはない。人々は哀悼の過程を始めることができないのであり、明らかに「明確な喪失」とは異なる何かに対応することを迫られるのである。しかし、彼女は、次のような点を強調する。

Boss は、フロイトの、「悲哀とメランコリー」(1917 年) に言及する。彼女によれば、フロイトは、ノーマルなグリービングにおいて、最愛の物体(人)との関係を手放し、やがて、新しい関係に移行することが、回復のゴールであるとしており、困難な過程ではあるが、それは、終わることが意図されているプロセスとして考えられているという。そして、「精神」が「健全」であるならば、このようなプロセスを比較的早期に達成することが期待されているとしている。しかし、曖昧な喪失においては、フロイトのいう「病的なメランコリー」、あるいは、今日のセラピストがいうメランコリー、あるいは複雑なグリービングとよぶような、過程をへなければならぬことは、極めて「標準的な反応」であり得るのだとする。そして、曖昧な喪失を解決できない原因を、喪失を経験している個人の内的なパーソナリティの問題に帰属すべきではなく、外的な状況、すなわち、不確実性と喪失の曖昧性に求めるべきだと主張しているのである (Boss,1999:9-11)。

#### (4) 曖昧な喪失がもたらす過程

「曖昧な喪失」を経験する人々は、「明確な喪失」とは、異なる、複雑な哀悼の過程をへなければならぬことが指摘された。そして、その過程は、「家族」「個人」の「病理」ではなく、極めて「標準的」なものであることが示された点に留意すべきである。今、少し、「曖昧な喪失」が家族にどのような過程をもたらすのか、検討しておこう。彼女の議論を概略すると、主に以下のような過程を列挙することができる (Boss, 1999, 2002a)。

まず一つ目が、喪失が曖昧であり、「最終的」か「一時的」かが不明確であるために、人々は、困惑し、身動きできなくなり、どのようにその状態を理解す

べきかわからないとともに、問題解決に向かうことができないこと。そして、不確実性が継続する場合、家族は、しばしば、両極的な否定—その人が「完全に不在」であるかのようにふるまう／変化の全否定—を行う傾向にあるということである。次にあげられるのは、不確実性は、人々が、「愛する人」との関係における役割と規則を再編成することを通じて、喪失の曖昧性に順応することを阻止するため、カップルあるいは家族関係を従前の役割と規則の元に凍結すること。そして、「家族境界の曖昧性」が持続することで、残された家族にアンビバレンスな感情—たとえば「愛情」／「憎悪」—が引き起こされ、このことが、家族のストレスを増幅することである。そして、最後に、人々は、「明確な喪失」を支援する象徴的な儀式を与えられることを拒絶され、彼らの経験は、周囲のコミュニティによって証明されないままであり、それゆえ、彼らが経験し、感じていることについての確証がえられないのである。よって、それを目撃する人たちは、家族に対し、親切なサポートを与えるというよりはむしろ撤回する傾向があるということである。

概観したように、家族は、喪失の曖昧性ゆえに、長期にわたり、しばしば、「曖昧な喪失」に起因したストレス状況に単独で対処しなければならない、ということである。しかし、彼女の基本的なモチーフは、「曖昧な喪失」は、直面する家族に、確かに、混乱とディストレスを導くものであるが、家族はその曖昧性に対処する方法を見出すことができる、というものである。とりわけ、何が失われ、何がまだ存在しているのか、明確にすることの重要性が説かれる (Boss, 1999: 24)。では、家族は、どのように、「曖昧な喪失」に対処していくのであろうか。曖昧な喪失のそれぞれのタイプについて、事例を紹介しておこう。

#### 4. 身体的不在／心理的存在に起因した「曖昧な喪失」

「私たちは、ちょうど、長い調査票を終えた。私が決して忘れることのないであろう物語を彼女が語ったのは、私がまさに帰る準備をしていた時のことであつた。…… (略) ……撃墜されてから、2度、夫が、彼女と話をするために戻って来たと彼女は話した。…… (略) ……夫が、2回目の訪問のために戻った。今度は、彼らの会話は、寝室で行われた。彼は、彼女はよくやったといい、彼女を誇りに思い、彼女を愛しており、そして今さようならを言おうとしていたところだと彼女に言ったと語った。「これが、私が彼が本当に死んでしまったことがわかった時です」と、彼女が言った。」 (Boss, 1999:27-28)<sup>(5)</sup>

これは、ベトナム戦争において行方不明となったパイロットの妻にインタビューした際の出来事である。いずれ帰還するか、死亡がたいてい確認される戦争捕虜と異なり、行方不明兵士の場合、その生死は、曖昧なままである。行方不明者の家族は、喪失を証明し、リアルなものとする遺体を見ることなしに、喪失、存在／不在に関わる認知を変更しなければならないという挑戦に直面することになる。行方不明兵士の名を MIA (missing in action) として刻むベトナム戦争記念館でさえ、多くの妻たちにとって、決定的な「死の確信」とならないのであり、また、定期的にもたらされた「生存」を連想させる情報は、哀悼の過程を妨げるものとなったのである (Boss, 1999:27)。

しかし、この妻は、夫の喪失の曖昧性に対処し、哀悼の完了へとむかった事例として、取り上げられている。最初に夫が彼女のもとを訪れた際、夫は、それまで彼女がしたことがなかった生活上の重大な決定（家の売却と転居、車の買い換え）を行うよう妻に指示する。妻はその指示に従い、決定し実行する。二度目に訪れた際、夫は、彼女の決定と実行を賞賛し、離別を告げる。Boss は、トマス (W. I. Thomas) の言葉を引用しつつ、「彼女が、この物語を真実であると認知していたので、結果として真実」であり、夫の象徴的存在が彼女に指示を供給し、そのことによって、妻は、新たな役割に順応することを押し進めることができたのだとしている (Boss, 1999:28)。すなわち、従前の家族における役割と規則—夫が家長であり生活に関わる重大な決定を行い、妻はそれに従う—を変更し、新たな役割と規則に順応し、夫が「失われた」ことを認めることができたのである。そして、この順応の過程を押し進めたのが、夫の象徴的存在による指示と承認であった。

今ひとつ、事例を紹介しよう。4人の男の子どものうち4歳から6歳にわたる3人の子どもが、日常、よく遊びにでかけた自宅近くの運動場から姿を消してしまったクレイン夫妻の事例である (Boss, 1999:81-82,86-87)。

「1989年11月12日、ミネアポリス「スター・トリビューン」新聞の広告は、私の同僚の目をひきつけた。そして、その同僚は、私の注意を促すためにそれを持って来てくれたのであった。『ケン、デイビッド、ダン・クレイン。1951年11月10日から行方不明。私たちは、今でも、あなたたちからの便りを待っています…。ママとパパより。[通知は2つの電話番号でとじられる。]』私たちは、アポイントメントをとり、このカップルにインタビューするために、モンティ

セロ、ミネソタに車を走らせた。そして、彼らは、私たちに、彼らの物語を話した。」(Boss, 1999:81)

この、広告は、この夫妻の子どもたちが姿を消してから、40年あまりたってから、出されたものであった。少年たちが姿を消したあと数週間、彼らは「すべてが、すぐに終わるであろう悪夢」であると希望し続けたという。1996年、ミネアポリス「スター・トリビューン」新聞社に、アリゾナのトラックドライバーから電話があった。彼は、自分がクレイン家の行方不明の息子の1人デイビッドであり、家族メンバーだけが知りうると思われることを話し、翌年、クレイン家へ訪問するであろうと言ったが、その男性は訪れることはなかった。その時のことを、もう1人の息子は「わたしたちみんなの希望は、しばらくの間、ふくらみました。しかしわたしたちは、もうこれ以上、夢中になりすぎることはない」と、語ったとある。クレイン夫人は、3人の子どもたちがいなくなった後、生まれてくる子どもとともに、一人残されたこどもに焦点を合わせたと言った。しかし、消えてしまった子どもたちを、完全に失われたものとしたわけではない。

ボスは、この事例に、「無意識の否定というよりは、希望に満ちた楽観主義の表出」を見出すという。曖昧な喪失に対し2つの両極的な反応—変化の全否定、と、愛する人が全くいなくなってしまったかのようにふるまうこと—、が起こりやすい。短期的にみれば、否定は、「潜在的な喪失の過酷な心理的現実からの、一時的な休息を供給」し、「不確実な不在あるいは存在から不可避免的に生じるディストレスを減ずる方法」であるとし、その緩衝効果を認めつつも、否定が不明確な喪失に適応するするための、創造的な選択肢と選択を阻止する場合、問題だとしている。クレイン家の人々は、否定の両極性というよりはむしろレジリエンスによって、曖昧性とともに生きる方法を見出しているともいえ、自らの喪失は否定しないが、肯定的な結果（子どもが生きていること）への希望も否定しないという、相反する考えを共存させている。ボスは、まさしく、「弁証法的思考的」「プラグマティズム」ともいえるかもしれないものだと、述べている。

## 5. 身体的存在／心理的不在に起因した「曖昧な喪失」

「ついに、解決策が彼女にうかんだ。彼女は、寝室にいき、ジュエリーボックスの前のドレッサーのところにたち、大きな悲しみを抱きながら、結婚指輪

をはずした。彼女は、自分の夫は、もういってしまったのだと結論づけるようになっていた。彼女がケアしているのは、他の誰かであった。彼女は、「より、一人の子どものような」と言った。その後、彼女は、以前に比べ、より上手に状況を管理できるようになった。……（略）……何年か後、夫が亡くなった時、彼女は、ジュエリーボックスのところに戻り、結婚指輪を取り出し、再び、自分の指にはめたのであった。彼女は、調査チームに語った。「今、私は、本当に、未亡人なのです。」（Boss, 1993:163）

これは、あるアルツハイマー病患者の高齢の妻の事例である。夫が、益々混乱し、性的な攻撃性が高まっており、これにどのように対処すべきか妻は、考えあぐねていたのであり、彼女はストレスフルな状況下にあった。ボスは、この物語を、ラロッサらが、シンボルと相互作用の連結 (LaRossa & Reitzes, 1993) とよんだ状況を示す事例としている。すなわち、アルツハイマー病に起因した曖昧な喪失に直面し、この女性は、夫が、身体的には存在するが、心理的には存在しないというグレーゾーンに対し新たなリアリティを構成する。彼女の結婚指輪は、彼女の妻としての役割の象徴であり、明確な行動期待を示すものでもある。この妻にとって、結婚指輪をはずすことは、夫との相互作用の意味を再定義することを示していた。彼女が、最終的に、自分が「結婚している人」の喪失が回復できないものであることを認めたとき、役割と相互作用を、愛しあう妻－夫という関係におけるものから、ケア提供者－成人の身体ではあるが「子ども」という関係のものへと、認識的に再構築したのであったのである (Boss, 1993:164)。

同じく、アルツハイマー病に起因した曖昧な喪失の記述をとりあげよう (Boss, 1999:50-56)。アルツハイマー病が進行していた母親と3人の息子の事例であり、母親も含め全員音楽家であった。父親はすでに他界しており、息子たちが「特別な方法」で、母親のケアをしていたという。ボスは、その「特別な方法」をよく示すシーンとして、彼らの家に招待された時のことを回想する (Boss, 1999:55-56)。

「私は遅れて到着したが、パーティーは、たけなわであった。私は、コートを着たまま2階にあがり、そして、ルースの寝室に誰もいないのを見てショックを受けた。もしや彼女は死んでしまったのでは？と、思った。私は、何を言うべきか思いなやみながら、慎重に階下へおりた。しかし、驚いたことに、彼女は、スパンコールを身にまとい、みな笑い、歌っている芸術家の友人と隣人

の一团に囲まれ、リビングルームにいたのであった。ルースのエッグノッグが入ったコップが危うく傾きそうになったとき、誰かが手を伸ばし、彼女のためにそれをまっすぐにしたのであった。人々が彼女に話をし、そして彼女は彼らに話をした。誰も、彼女の言葉が支離滅裂であることを気にしているようには思われなかった。」(Boss, 1999:55-56)

息子たちは、母親の言葉を「特別な言語」として聞き、彼女の「子供らしい行動」を魅力的であると考えた。息子の一人トムは、彼女の言葉を、「アバンギャルドな詩歌の一種」のように聴いた<sup>(6)</sup>。確かに、「アルツハイマー病」と診断され、彼女に変化が起き始めたとき、彼らは、最初、ショックをうけたという。しかし、彼らは、両極的な否定を行うことなく、「母親の新しい存在の仕方」を受け入れた。「ある朝、母親が、「私はフィクションではありません。」と宣言し、自分のおかれた状況を約言したとき、彼らは大喜びしたのであった。」(Boss, 1999:164)。

先に示した事例では、妻は、夫を一時的に「失われたもの」とし、「子ども」とみなすことで、夫婦関係から親子関係へと、役割と相互作用を再定義している。つまり、従前の地位関係に基づく、役割や相互作用そのものについての再定義は保留されている。一方、この事例においては、息子たちによって、母親は、「失われたもの」とはみなされていない。母親の「変化した部分」を了解不能なものとして無効化するのではなく、「変化した部分」も含め「母親」なのであり、この修正された認識を基盤に、彼らは、母親との相互作用の意味を再定義しているのである。この過程を可能にしているのは、母親が、「アルツハイマー病」の「症状」や「能力低下」、「自分」、「家族」について、どのように認識し、あるいは表現し、それとともに生活しているのかという生きられた経験としての病い (illness) という文脈で、彼女の行為の意味を理解しようとする彼らの想像力に他ならないのではないか。そして、この想像力は、「社会の慣例」一すなわちアルツハイマー病にまつわる悲劇を語ることをのりこえ、日々、「変わりゆく」母親との相互関係を再編し続ける創造力に連結しているということもできる。そして、この母親も、この過程に、加わっているのである。

## 6. 「曖昧な喪失」研究の意義と総括

以上、ボスの議論を概観した。彼女の議論は、家族の多様化をふまえ、そして、家族研究の学的動向にも注視しながら、進められており、その議論の展開

可能性が期待できる。「曖昧な喪失」を切り口に、家族が構成するリアリティをもとに、日常における家族の経験や意味へ接近する手法や、こうした家族のリアリティ構成を水路づける家族内部／外部のコンテクストの設定など、近年の「家族問題」研究のとりうる一つの方向といえるのかもしれない。そして、「日常的なこと」から「予期しえない」ことまでも射程に含もうとする姿勢は、「家族問題」を「特定」の「家族」の「問題」としない、という、今日の、家族問題研究のコンセンサスの一つとも通じている<sup>(7)</sup>。また、議論全体を通じて、「個人療法」「家族療法」「精神医療」を全否定しないまでも、それらから、一定の距離をたもち、あくまでも、家族の意味や解釈から、曖昧な喪失経験を理解しようとしている。彼女はアルツハイマー病患者や慢性精神病患者のナラティブにも注意をはらっている。従前の研究や実践において看過され、あるいは、無効化されやすかった彼／彼女たちの語り（ミッシングナラティブ）をとりあげることによって、あらたな「家族の物語」を発見することができるのである。そして、このような視点から、セラピストや医療従事者は、従来の権力関係や「医療モデル」をのりこえる立場にたつことが強調される。これもまた、昨今の、医療人類学やナラティブセラピーとの共通性をみてとることができるのである。

しかし、いくつかの疑問も残されている。全般的に言えば、「曖昧な喪失」や「家族境界の曖昧性」「家族外コンテクスト」「家族内コンテクスト」など主要な概念が呈示されているが、それぞれの概念観の関連が必ずしも明確ではない部分があること、そして、「家族システム」レベル、「家族成員個人」レベルの関連も、検討の余地があるだろう。これは、家族をシステムとしてとらえたヒルの ABCX モデルにヒントをえつつ、認知要因としての C 要因に焦点化（個人の意味や解釈）していることに起因しているともいえる。そして、議論の根底をなす「存在」「不在」の定義が不明確である点も指摘しておこう。例えば、「身体的不在」いう場合、対面的な状況にないという意味での「不在」も含まれているが、どの程度が「不在」とみとめうるかは、明確ではない。また、「心理的不在」にしても、親密さの喪失であったり、身体的不在という認知であったりと、定義にゆれが生じている。

さらに、その他の問題点をここでは「家族」に絞って指摘しておこう<sup>(8)</sup>。その一つは、彼女の「家族」観は、家族の形成の契機、家族の範囲や相互作用の可変性・流動性など、極めてゆるやかであるが、一方で、「家族」に厳格な基準を与えている。彼女は、「ある意味、私は「家族」という言葉を漠然と使っている



が、私の基準はそれにもかかわらず厳格である。家族とは、快適さ、ケア、養育、サポート、生命維持と情緒的親密さを長い時間にわたって当てにすることができる人々の親密な集団を意味する」(Boss, 1999:4)とも述べている。また、著書 *Family Stress Management*(Boss, 2002a)は、社会にとっての家族の重要性、そして、「社会問題」に起因する過酷なストレス状況に対処する家族の能力を理解することの必要性が主張される序文から始まっている (Boss, 2002a:ix)。

すなわち、「家族」は、人々、あるいは、社会にとって、必要なものであり対個人的・対社会的機能の重要性が強調されているのである。こうした主張は、たしかに、今日、一定の社会においては、同意がえられるものであるのかもしれない。また、「曖昧な喪失」を経験する家族を支援する実践家としての顔を持ち、実践と理論との循環関係を重視する彼女からすれば、実践的なゴールとして、「家族」によるストレス状況の克服に焦点をあてることは、無理もないことかもしれない。しかし、こうした形での「家族」の潜在的な対処能力の強調は、社会においてストレス対処への一義的な責任を「家族」にとどめおくことになるとともに、「家族」の限界性を抽出する視点が抜け落ちてしまう可能性があるということができる。

また、このことにも関連するが、彼女が着目する物語の多くは、アメリカの家族によるものであり、「愛情（親密さ）」、「結婚指輪」の象徴的意味、非通例的な現象ではない「離婚」（そして、新しい拡大家族の形成）、「家族の境界」を象徴する家族儀礼（サンクスギビングやクリスマスホリデーなど）の参加者リスト、「家族らしさ」を演出する家族写真など、議論のキーをなす概念や事象の多くが、クロスカルチャーに適用しえない可能性が高いものであることが指摘しうる。また、「曖昧な喪失」が生じる状況を分類する、予期できない破局的状況／より日常的な状況、という軸も、同様の問題を孕んでいることが考えられる<sup>(9)</sup>。よって、家族外コンテクストとしての文化・社会状況や家族内コンテクストとしての個人の価値・信念体系と喪失体験との連関について、彼女がどのように議論しているのか詳細に検討する必要があるだろう。

以上、最後に、彼女の議論の意義を確認するとともに、その問題点についても若干ふれることができた。彼女の議論にちりばめられた、臨場感あふれる家族の相互作用やナラティブに関する記述は、今後の発展可能性を期待させるものでもあり、家族研究としてだけではなく、喪失研究という文脈においても、大いに検討される余地がある。今後、機会をあらため、さらに、その研究の細部について検討を深めていくこととしたい。

## 注

- (1) ボスが「曖昧な喪失」について包括的に論じた、Ambiguous Loss, Harvard University Press の訳書が、近刊の予定であるので、原著とともに、参照されたい。ポーリンボス著・南山浩二訳『曖昧な喪失―解かれていない悲嘆とともに生きる方法を身につけること―』学文社（近刊予定）
- (2) 日本で展開された議論にふれておこう。ファミリーアイデンティティ(FI:family identity)―「何を家族と同定(identify)するかという「境界の定義」」―に注目し、「家族」を営む個人の認識から「家族」に接近したファミリーアイデンティティ論(上野, 1994:5-6)は、ボスの「家族境界の曖昧性」をめぐる議論とほぼ同様の議論を展開しているといえる。今日、このような研究を先駆けとした、「家族とは何か」をダイレクトに問う構築主義的家族研究などが盛んに行われている現状にあるといえるが(田淵, 2000)。その他、「一定の家族」を前提としない議論としては、安達(安達, 1999)や藤崎(藤崎, 1998)らの、高齢者を「個」として捉えようとする議論をとりあげることができる。これまで、「家族」との関係においてのみ主題化されることが多かった高齢者を、「個」として捉えることで、高齢者を「家族」に限定されない社会関係との関わりにおいて論じることを可能としている。また、個人レベルのストレスへの社会学的営為(石原編, 1999)も、こうした近年の研究動向の内にあるものとして認めることができる。この議論では、特定の「個人」を通じて「家族」という関係を照射し、夫婦関係、親子関係、被介護者―介護者関係などダイアド関係(2者関係)に焦点をあてることが多い。「ストレス(stress)」は、制度・文化などの抑圧的・拘束的側面を抽出するための概念として位置づけられており、「家族」という場において営まれる相互関係が個人にストレスをもたらすこともあるとの前提に立つ。よって、この立場からの「家族」への接近では、「家族=やすらぎの場」という図式を無条件に前提とせず、「家族」関係が、個人にとってストレス生成装置とも成りうるという理解にたっており、研究の射程は、いわゆる「問題家族」として括られてきたような「家族」に限定されておらず、「一般家族」へと広がっているのである。
- (3) これは、かつての家族病理学における「家族問題」への主要な視角である。戦後から1970年代くらいまで、「近似的等式として、「非標準的家族⇔問題家族」が成り立っていた」ことが想起できることや、当時主流をしめていた社会学理論である構造―機能主義の影響などを背景(山田, 2000:129-130)に、「家族問題」に対するアプローチとして採用され続けてきたものであった。しかしながら、「標準となる家族には問題はない」という前提にたち、また、その記述は、逸脱の有無、という静態的な記述にとどまるきらいもあった。
- (4) さて、新たなステージに移行した「家族問題」研究にも「新たな問題」もある。山根真理は、育児問題の原因を母親に帰属させる「母子関係パースペクティブ」が、フェミニズムや歴史社会学の成果を背景に批判され、それをのりこえる形で、育児不安研究・育児ネットワーク研究が登場した経緯を検討している。育児不安研究・育児ネットワーク研究は、社会的支援の必要性を説くことを可能としたが、その成果がマスメディアや行政の政策を通じて「一人歩き」することで、結果として子育ての意味の喪失・子育て責任の放棄ともよべる状況を導くおそれがあり、今後、こうした「研究の「意図せざる帰結」」についても考える必要性が生じていると指摘している(山根, 2000:37)。また、清水新二は、昨今の近代家族問題論の有効性を大いに評価しつつも、「同時に近代家族モデルが克服された家族制度が到来すれば、オールマイティに“家族問題”が解消するとみるほど非現実的な予定調和主義のオプティミズムはあり得ない。」とのことわりをつけている(清水, 2000:310-311)。「理想的とされた家族(=近代家族)」を超えたところに、「万能な答え」があるのか。単なる相対化の議論ではなく、「相対化に伴う問題」「相対化された後の問題」も含めた議論の必要性が浮上しているのである。そして、「モデルなき時代」の家族研究が、「個人」「意味」などに基点をおき、そこから議論を立ち上げようというのも当然の帰結ではあるが、その場合、如何なる「個人」像を前提としているか、検討しておく必要があるだろう。というのも、多くの議論の場合、

前提となる「個人」像は、＜自律＞＜労働＞などの能力をもつ「個人」であることが多い。しかし、意図する／意図しない、(存在を)認識している／認識していない、にかかわらず、こうした「個人」像を設定することは、これにあてはまらない人々を、議論の射程から排除してしまうことになる、ということにも留意が必要であることを強く記しておきたい。「一定の(家族)モデル」を相対化する議論は、議論の単位を「個人」へと解体せざるを得ない。しかしながら、その議論は、紛れもなく「一定の(個人)モデル」を前提とする。(南山, 2001)。

- (5) それまで、「客観的なデータ、客観的事実だけを記録する社会科学者としてトレーニングを受けていた」彼女は、最初この話を聴き取ることができなかったという (Boss, 2002:28)。

- (6) 母親とトムとの間で取り交わされた会話の一部を示す (Boss, 1999:54-55)。

Tom 「あなた私を見ているとき、何を考えているの？」

Mom 「あなたを愛しています…。本当にとっても。あなたは、3か6を持っているかもしれないけど、私はわからない。」

Tom 「3か6って、何のこと？」

Mom 「平和、私はわからない。」

Mom 「あなたの番号は何？ねえ。」

Tom 「私の名前のこと？」

Mom 「ええ。私はあなたを何と呼ぶの？」

Tom 「トムだよ。」

Mom 「パパ〔彼女の夫〕はどこにいるの？」

Tom 「5年くらい前に死んだよ。」

Mom 「えー、彼は続かなかったの？」

Mom 「パパが死ぬ前に、わたしたちが彼に会ったことがうれしい。」

Mom 「あなたは誰？」

Tom 「私はトムだよ。あなたは誰？」

Mom 「何もない？」

Tom 「何もない？」

Mom 「ここに何もない。私は、私はいたと思ったけれど、今はいない。」

Mom 「あなたは、夜、ママと小さい娘にキスしないの？それから、私は今すぐ、そうして欲しい。」

- (7) 例えば、日本家族社会学会企画＜家族はいま…＞シリーズ第4巻『家族問題－危機と存続』（清水編, 2000）もその一つの試みといえよう。この論文集では、「システム論的家族危機」がキーワードに設定されている。ここで言う「家族危機」とは、「(1)あくまでもシステム論的見地にたって、(2)システムの変化（社会システム、家族制度システム、個別家族システム、固体システムのすべてを含む）という文脈」におけるものであり、「変化、移行を要請されているにもかかわらず、そうした状況に対応できずに対処指針さえも喪失している状況」（pp2-3）である。「変わるに変われない」という「家族危機」の理解。家族危機が「成長や新たな展開の契機」となりうるとの理解。問題探索的アプローチに基づく「ポジの中にネガを見、ネガの中にポジを見る」手法によって、少数の「問題家族」と多数の「一般家族」を関連しつつ見ようとする方法、など。こうした議論は、システム・フィットネス（システム間適合性）—ある「家族問題」が「問題」的でなくなり「普通」になる程度—とシステム・レンジ（生存の多様性）—当該社会においてシステム・フィットネスの一定程度の高さが観察される範囲—という概念をもとに展開される議論へと結びついている。いずれの議論も、家族ストレス論に多くの部分を依拠していることがわかるが、これらの発想が、一定の家族モデルからの逸脱を家族病理とみる固定的な視点によるものではなく、「家族」を動的に捉えようとする試みであることが理解できよう（南山, 2001）。

- (8) たとえば、喪失については、次のような疑問が生じる。ボスはたびたび、「曖昧な喪失」経験の特徴を浮きただせるために「明確な喪失」として、遺体の存在（見ること）あるいは

喪失を確証づける儀式などをとものた「死」をとりあげる。人々は、死を確証づけるイベントを通じ、「永遠の喪失」を認め、哀悼のプロセスを始めとする。しかし、いわゆる「早すぎる死」や、ライフコース上の非通例的なイベントにより生じた「死」において、このような死を確証づけるイベントが、順調に「死」を「明確な喪失」とすることができるのだろうか、という疑問が残る。この疑問は、たとい「天寿を全うした」とされる、老年期に生じる予期しえた「死」の場合においてもである。喪失に関わる疑問は、稿をかえて論じる予定である。

- (9) ボス自身も、「曖昧な喪失」に関する研究における自分の知見と解釈が、エスノセントリズムに陥っているのではないかとの疑問を抱き、「病気を克服することを気にかけていない家族」の語りをひろうため、ミネソタ北部に住むネイティブアメリカン Anishinabe の、痴呆高齢者の家族である女性たちにインタビューを行ったり、インターレイシエルな結婚における文化の問題などにも言及している (Boss, 1999)。

### 文献 (Pauline Boss 関連)

- Boss, P. (1977). A clarification of the concept of psychological father presence in families experiencing ambiguity of boundary. *Journal of Marriage and the Family*, 39 (1), 141-151.
- Boss, P., McCubbin, H. L., & Lester, G. (1979). The corporate executive wife's coping patterns in response to routine husband-father absence: Implications for family stress theory. *Family Process*, 18 (1), 79-86.
- Boss, P. (1980) The relationship of psychological father presence, wife's personal qualities, and wife / family dysfunction in families missing fathers. *Journal of Marriage and the Family*. 42 (3), 541-549.
- Boss, P. (1983). The marital relationship: Boundaries and ambiguities. In C. Figley & H. McCubbin (Eds), *Stress and the family*. New York: Plenum.
- Boss, P., & Greenberg, J. (1984) Family boundary ambiguity: A new variable in family stress theory. *Family Process*, 23 (4). 535-546.
- Boss, P. (1986). Psychological absence in the intact family: A systems approach to a study on fathering. In M. Sussman (Ed.), The charbidis complex [special issue] . *Marriage and Family Review*, 10 (2), 11-33.
- Boss, P., Pearce-McCall, D., & Greenberg, J. (1988a) Normative loss in midlife families: Rural, urban, and gender differences. Rural families [special issue]. *Family Relations*, 36, 437-443.
- Boss, P., Caron, W., & Horbal, J. (1988b). Alzheimer's disease and ambiguous loss. In C. Chilman, F. Cox, A. Nunnally (Eds.). *Families in trouble*. Newbury Park, Sage.
- Boss, P., Caron, W., Horbal, J., & Mortimer, J. (1990). Predictors of depression in caregivers of dementia patients: Boundary ambiguity and mastery. *Family Process*, 29, 245-254.
- Boss, P. (1991). Ambiguous loss. In F. Walsh & M. McGoldrick (Eds.), *Living Beyond Loss; Death and The Family*. Norton.
- Boss, P., Doherty, W., LaRossa, R., Schumm, W., Steinmetz., S (Eds.) (1993), *Sourcebook of Family Theories and Methods: A Contextual Approach*, Plenum Press
- Boss, P. (1993). The Reconstruction of Family Life with Alzheimer's Disease: Generating Theory to Lower Family Stress from Ambiguous Loss, In P. G. Boss, W. J. Doherty, R. LaRossa, W. R. Schumm, S. K. Steinmetz (Eds.), *Sourcebook of Family Theories and*

- Methods: A Contextual Approach*, Plenum Press, pp163-166
- Boss, P. (1999). *Ambiguous Loss*, Harvard University Press.
- Boss, P. (2002a). *Family Stress Management: A Contextual Approach*. Second edition, Sage.
- Boss, P. (2002b). Ambiguous Loss: Working with Families of the Missing. *Family Process*. 41 (1) :14-17,

#### 文献（その他、引用、言及したもの）

- 安達正嗣 (1999)『高齢期家族の社会学』世界思想社
- Burgess, E. (Ed.). (1968). The urban community. New York: Greenwood. (Original work published 1926)
- Burr, W., Leigh, G., Day, R., Constantine, J. (1979). Symbolic interaction and the family. In W. Burr, R. Hill, F. I. Nye, I. Reiss (Eds), *Contemporary theories about the family*, Vol.2, pp42-111, Free Press.
- 藤崎宏子 (1998)『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館
- Hill, R. (1949). *Families under stress*, Haper & Brothers.
- 石原邦雄編 (1999)『妻たちの生活ストレスとサポート関係』東京都立大学都市研究所
- LaRossa, R., Reitzes, D. C. (1993). Symbolic interactionism and family studies. In P. G. Boss, W. J. Doherty, R. LaRossa, W. R. Schumm, S. K. Steinmetz (Eds.), *Sourcebook of Family Theories and Methods: A Contextual Approach*, Plenum Press, pp135-163
- 南山浩二 (2001)「書評 シリーズ〈家族はいま…〉④『家族問題－危機と存続』（清水新二編）」家族問題研究会編『家族研究年報』No26, pp66-70.
- 清水新二 (1998)「家族問題・家族病理研究の回顧と展望」『日本家族社会学会 10 周年記念 特集号 家族社会学研究』10（1）号, pp31-83
- 清水新二編 (2000)『家族問題－危機と存続』ミネルヴァ書房
- 田淵六郎 (2000)「構築主義研究の動向」日本家族社会学会『家族社会学研究』12（1）号, pp117-122
- Trochmann, L., Perry, Y., Grotevant, H. (2001). *Family Social Science*, University of Minnesota Printing Services.
- 上野千鶴子 (1994)「ファミリーアイデンティティ論」上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』岩波書店, pp3-42
- 渡辺秀樹 (1996)「転換期の家族社会学－シンポジウムの司会を担って－」日本家族社会学会編『家族社会学研究』8, pp3-5
- 山田昌弘 (2000)「問題家族」の臨床社会学」大村英昭・野口裕二編『臨床社会学のすすめ』有斐閣, pp123-148
- 山根真理 (2000)「育児不安と家族の危機」清水新二編『家族問題－危機と存続』ミネルヴァ書房, pp21-40